

る地域が多い。しかし、奄美群島は、日本列島で沖縄諸島・先島諸島、小笠原諸島とともに亜熱帯環流内に位置している地域であり、その外縁部分を貫流する黒潮とモンスーン（大気循環）の影響により、中緯度乾燥帶には稀な亜熱帯湿潤気候となる。

名瀬地区の年平均気温は 21.6°C と温暖で、鹿児島市に比べて 3.0°C 高い。年平均降水量は 2,837.7mm で東京の約 2 倍の降雨がある。梅雨時期の 5 ~ 6 月、台風時期の 8 ~ 10 月は降水量が多く、さらに 11 月から 4 月も月平均降水量が 150mm を超える日本有数の多雨地域である。年間におけるおおよその季節区分としては、春（3・4 月）、初夏（5・6 月）、夏（7・8 月）、秋（9・10 月）、晚秋（11 月）、冬（12～2 月）となる。

（2）地形・地質

笠利地区は、中央を南北に縦断する山脈によって東海岸と西海岸に分けられる。東海岸では段丘地形が発達した台地が広がり、海岸線の砂丘地形やサンゴ礁も発達している。西海岸では山地が海岸まで迫り、山地に挟まれた狭い沖積平野が認められ、サンゴ礁と干潟が発達している部分がある。東海岸では、和野集落から土盛集落にかけて東西 2 列の砂丘列が拡がっている。奄美大島でも比較的大きな規模の砂丘である。現在の海岸線に形成されている砂丘は、完新世新砂丘（約 2,000~3,000 年前以後に形成された砂丘）と理解されているもので、弥生時代並行期以降の遺跡が分布している。

その背後の砂丘は、完新世古砂丘（約 6,000~7,000 年前より以前に形成されている砂丘）と理解されているもので、縄文時代後期・晚期頃及び中世の遺跡が分布している。宇宿貝塚もこの砂丘上に位置している。

宇宿貝塚は、砂丘に所在していることから、史跡の本質的な価値を構成する要素として、その地形的特徴的理解を深めておく必要もある。そこで、羽田麻美委員（自然地理）と砂丘地形を中心とする自然

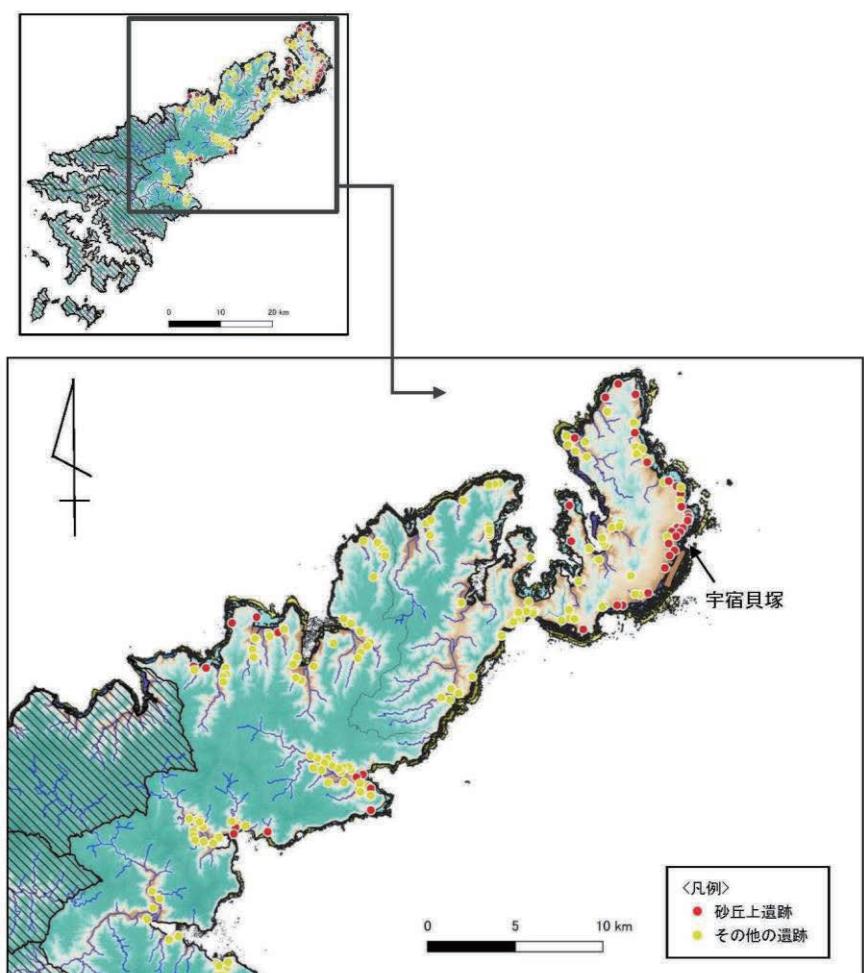
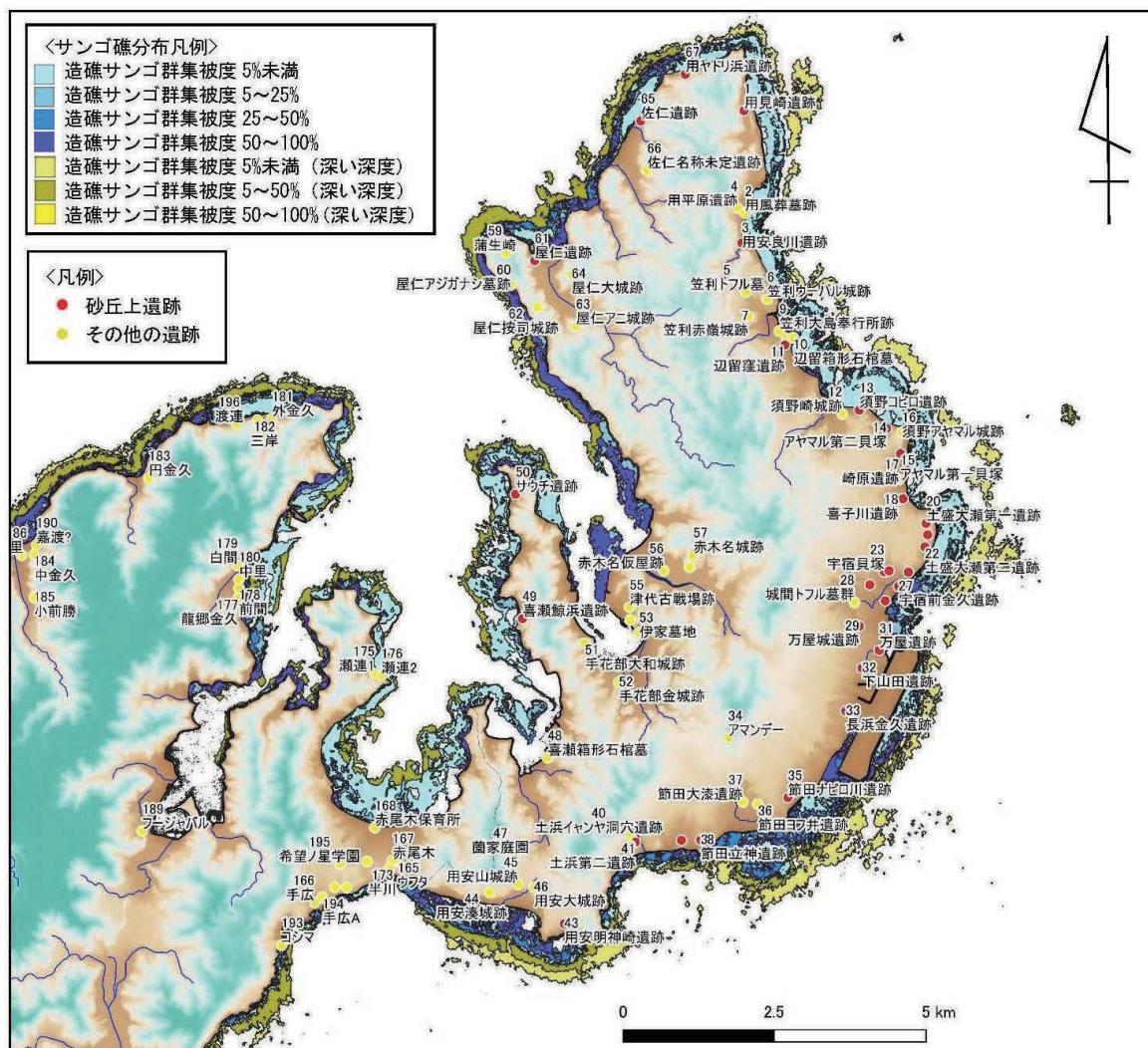


図6 奄美大島における立地環境別遺跡分布図
(大和村・宇検村・瀬戸内町は除く)

環境調査を実施した。その調査報告の概要は、以下のとおりである。

奄美大島北部（奄美市笠利町、龍郷町）には、196箇所の遺跡が認められる。その中でも、砂丘上に立地する遺跡は、台地や低地の占める割合が大きい笠利地区の東海岸に集中して分布している（図6）。東海岸は、山地が卓越する大島中南部に比べて、サンゴ礁（裾礁）地形や海成段丘の発達が良い地域である。大島の海成段丘は、高位・中位・低位の3群に大別でき、笠利地区では中位面群（標高10～60m）が広く分布する（池田1977）。また、これら段丘面の高度分布から、中位面が形成された125,000年前以降の大島では、笠利地区でやや急速な隆起域が形成されたこと、それ以外は不動ないし若干の沈降傾向にあることが推測されている。それが、笠利地区において、海成段丘が顕著に発達していることやその後に生じる砂丘形成にも影響を及ぼすものと考えられる。笠利地区の東海岸における砂丘形成の要因は、完新世（特に縄文海進）以降、サンゴ礁・礁池部から供給される多くの砂が幅広い海浜を発達させ、冬季の北～北東季節風の影響により飛砂が豊富に生じ、それら飛砂を堆積させる段丘崖等の地形が連続的に分布する環境があったことだと想定される（目



サンゴ礁分布は、「気候変動適応計画推進のための浅海域生態系現況把握調査」による奄美群島のGISデータ（環境省生物多様性センター）を使用し、QGISにて作成・加工したものである。

図7 笠利地区における遺跡分布とサンゴ礁地形(海域の青色～水色部分が裾礁の分布範囲を示し、それより外洋側の黄色で着色した部分は礁嶺外側の水深が深い場所に分布するサンゴ礁を示す)

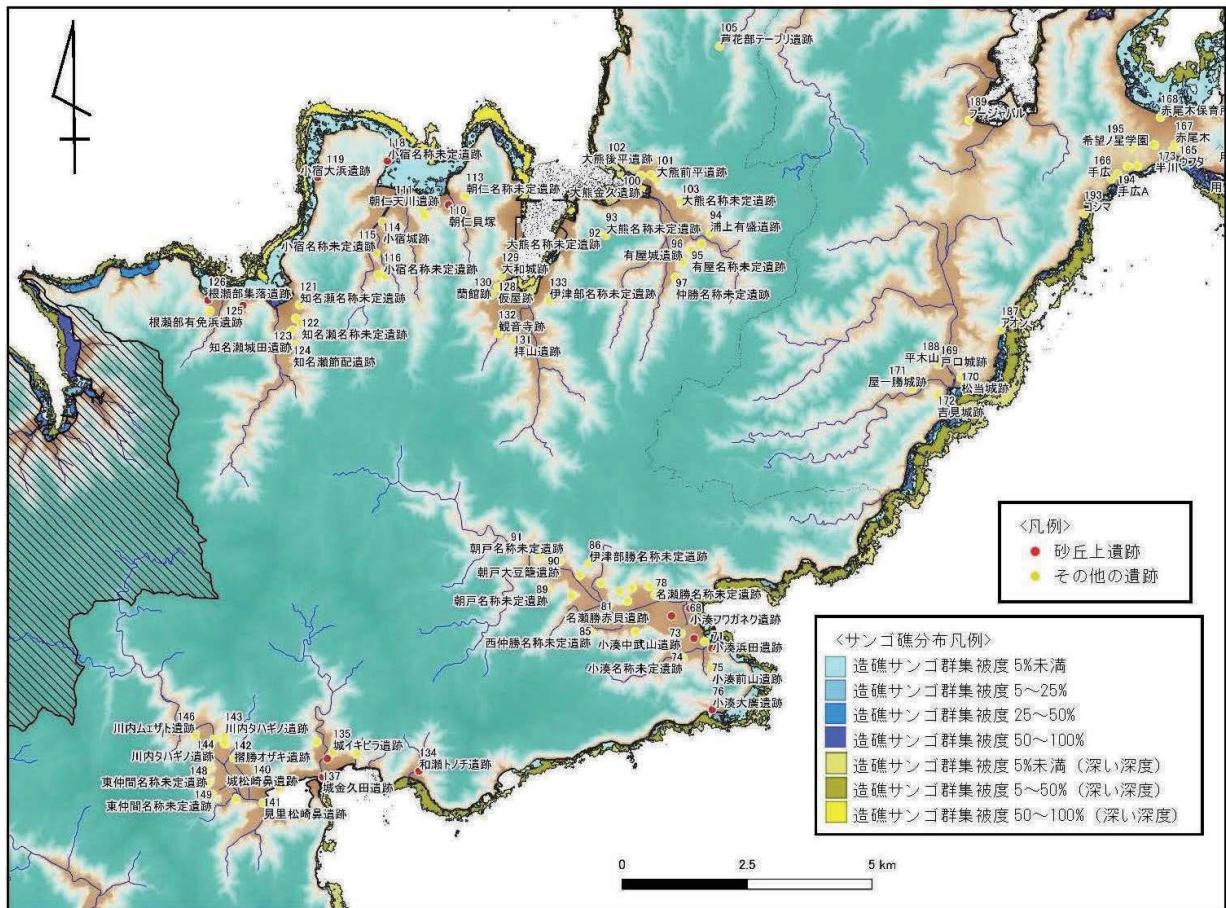


図8 大島中部における遺跡分布とサンゴ礁地形

崎 1998)。

笠利地区における遺跡分布とサンゴ礁地形の広がりを見ると、地形と砂丘上遺跡の分布が大きく関係していることが確認できる(図7)。宇宿貝塚と同様に、大型砂丘上に立地する小湊フワガネク遺跡(奄美市名瀬)の立地環境をみると、サンゴ礁地形の発達は限られており、その規模は笠利半島に比べてはるかに狭小であることが分かる(図8)。

また、両遺跡が立地する砂丘の構成砂は、図組成が異なる(写真3)。すなわち、宇宿貝塚の砂丘は、サンゴや有孔虫、貝殻片等のサンゴ礁に由来する生物遺骸を多く含む海浜砂が主体であり、小湊フワガネク遺跡の砂丘では大川による川砂と海浜砂が混合した構成を成す。砂丘砂の構成から、東海岸では完新世におけるサンゴ礁(裾礁)の発達とともに、海域から供給される風成砂により砂丘が形成されたと考える。サンゴ礁は、陸域に砂浜と砂丘という地形環境を形成させることに加え、サンゴ礁を中心とした多様な生態系を生み出す。礁地形の発達とともに人間にとての豊かな食料



写真3 宇宿貝塚(左)と小湊フワガネク遺跡(右)が立地する砂丘の構成砂

資源確保の場が形成され、縄文時代以降、砂丘上が居住地として選択されるようになった。さらに、宇宿貝塚周辺は、特に砂丘上遺跡が集中している（図9）。この地域は、前川（河川）が形成した低地帯に位置しており、河川の存在が砂丘の大型化や水資源確保の観点から遺跡立地条件のひとつになったと考える。

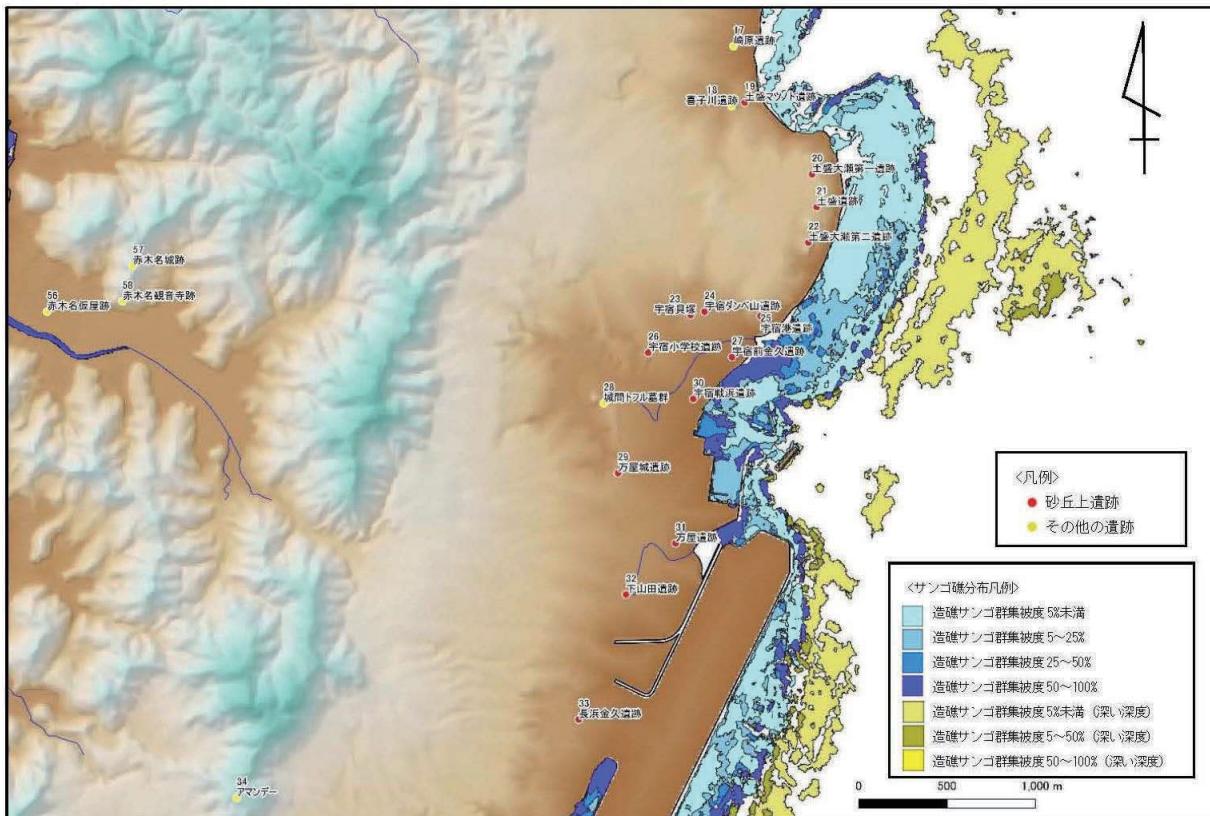


図9 宇宿貝塚周辺の地形と遺跡分布

(3) 植物相

宇宿貝塚が所在する砂丘地及びその周辺について、高美喜男氏（奄美市文化財保護審議会委員）と平城達哉（奄美市教育委員会文化財課）で植生調査を実施し、その分布状況を確認した。調査地は、宇宿貝塚が立地する古砂丘及び後背農耕地一帯を調査地X、古砂丘形成後の砂丘地の住宅地及び農耕地一帯を調査地Yとした（図10）。

調査地Xにおいては、60種の植物が確認された（表8）。遺跡に影響を及ぼす可能性が考えられる植物種は、アカギ、ギンネム、ト

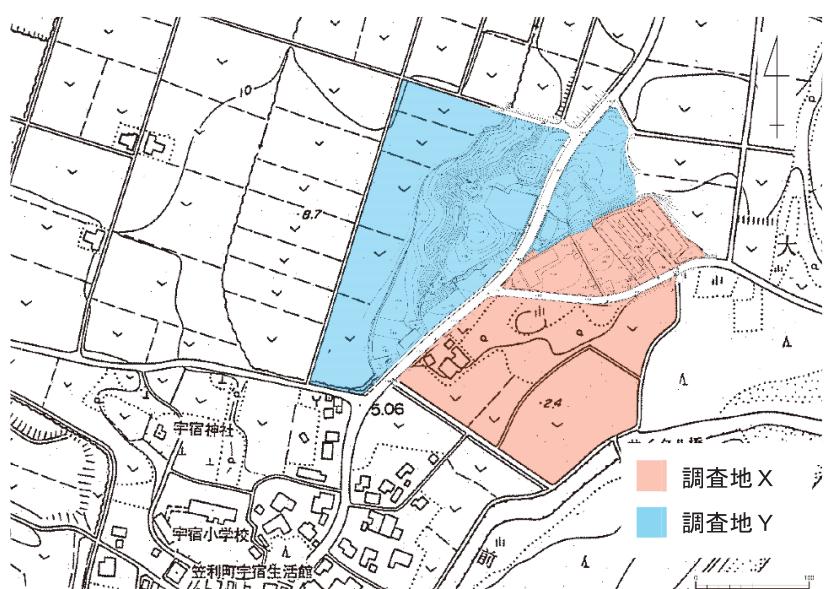


図10 植生調査地

樹木の種類	和名
樹木 (35種)	シマグワ・タイワンウォクサギ・ツゲモドキ・アカギ・ガジュマル・ハマビワ・ゴモジュ・オオバギ・トベラ・モクタチバナ・マルバチシャノキ・アカメガシワ・ゲッキツ・マサキ・オオハマボウ・リュウキュウタラノキ・ヤブニッケイ・シャリンバイ・フカノキ・ハマヒサカキ・ソテツ・フクマンギ・カンコノキ・イヌマキ・オオシマコバンノキ・ホルトノキ・ギョクシンカ・クチナシ・ヤドリフカノキ・トクサバモクマオウ・イヌビワ・リュウキュウエノキ・アカテツ・ブッソウゲ・オキナワキヨウチクトウ
つる性 (10種)	クズ・フウトウカズラ・オオイタビ・ノアサガオ・テリハツルウメモドキ・サツマサンキライ・オキナワティカカズラ・シラタマカズラ・ハマサルトリイバラ・ムベ
草本 (15種)	アキノノゲシ・ヤブラン・カタバミ・ゲットウ・リュウキュウコスマレ・オニヤブソテツ・ツルソバ・カラムシ・ニショモギ・タイワンソクズ・シロノセンダングサ・ススキ・キキョウラン・クワズイモ・アマクサシダ

表8 調査地Xに生育する植物一覧

クサバモクマオウの3種が認められた。この3種は奄美大島へ移入されたもので、大木になると深く根を張る樹木であることから、遺跡の保存に影響を及ぼしかねない。その他に確認された植物種は、農耕地、住宅地や海岸に生育するものが大半を占めていた。

調査地Yにおいては、38種の植物が確認された（表9）。遺跡に影響を及ぼす可能性が考えられる植物種は、ギンネムの1種のみだった。その他に確認された植物種は、古砂丘と同様に農耕地や海岸に生育するものが大半を占めていたが、中には庭木として植えられているものも見受けられた。

先述したアカギ、ギンネム、トクサバモクマオウの3種は、幼木が散見されたので、今後の生育状況を注視しておく必要がある。

樹木の種類	和名
樹木 (24種)	ガジュマル・ハマビワ・ソテツ・ゲッキツ・シマグワ・アカテツ・ヤドリフカノキ・オオシマコバンノキ・フクギ・モクタチバナ・ヤブニッケイ・タイワンウォクサギ・オオバギ・オオハマボウ・トベラ・マサキ・イヌビワ・ホルトノキ・サキシマフヨウ・センダン・オオムラサキシキブ・ギンネム・インドゴムノキ・ゴモジュ
つる性 (7種)	フウトウカズラ・ハスノハカズラ・オオイタビ・ヘクソカズラ・テリハノブドウ・ノアサガオ・リュウキュウガネブ
草本 (7種)	ツルソバ・アキノノゲシ・オニヤブソテツ・タマシダ・ススキ・ゲットウ・アマクサシダ

表9 調査地Yに生育する植物一覧



写真4 アカギ



写真5 ギンネム



写真6 リュウキュウタラノキ



写真7 ソテツ

(4) 動物相

宇宿貝塚が所在する砂丘地及びその周辺の動物相の調査として、平城達哉（奄美市教育委員会文化財課）が鳥類ルートセンサス調査ならびに夜間ルートセンサス調査を実施した。調査期間は令和3年（2021）11月から令和4年（2022）10月までの1年間で、調査は月に1回の計12回行った。結果は以下のとおりである。

これらの調査を通して、多数の動物種の生息が確認されたが、遺跡に影響を及ぼす可能性のある種は認められなかった。

①鳥類ルートセンサス調査

遺跡所在地内は、海岸、河川、農耕地、草地、森林等の自然環境が認められ、大瀬海岸や宇宿漁港をはじめ、奄美大島でも有数の渡り鳥の渡来地が所在する。今回は鳥類の分布状況を把握するため、図11の調査ルートを自動車で走行し、目視もしくは鳴き声によって識別できた種を全て記録した。調査開始時刻は、午後3時からとした。

12回の調査を通して、計68種の鳥類を確認した。そのうち、年間を通して同じ地域に生息する留鳥が13種、季節の移り変わりにあ



図11 鳥類ルートセンサスにおいて観察された鳥類の位置

わせて移動する渡り鳥が 55 種だった。これまでに奄美大島で記録された鳥類は 315 種である。今回の調査では、その約 22%が確認されたことからも、この地域が鳥類にとって適した自然環境が残されているといえるだろう。

全ての月で観察されたのは、留鳥のリュウキュウキジバト、アマミヒヨドリ、イソヒヨドリだった。記録された留鳥は、われわれの生活圏内である住宅地や農耕地、草地などを主な活動場所とする種がほとんどだった。また、調査外の時間では、オーストンオオアカゲラやアマミコゲラなどのキツツキの仲間、カラスバトも観察することができた。

秋から春にかけては、多くの種類の渡り鳥が渡来してきており、大瀬海岸、大瀬海岸へ流れ出る前川、宇宿漁港では、特に多くの水鳥が確認された。

奄美大島には国際的にも希少な固有種が数多く分布している。今回の調査においても、環境省が定めるレッドリストに掲載されている種が 14 種確認された。

また、表 10 に掲載していない種でも、渡り鳥の中継地として多くの鳥類が立ち寄っており、令和 2 年（2020）4 月には、調査地内の農耕地において、奄美大島で初記録となるオオカラモズも確認されている。

土地環境	和名	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
海	ヒシクイ		●										
海	ヒドリガモ			●									
川・海	ハシビロガモ	●			●								
川・海	コガモ	●	●	●	●								●
川	カイツブリ	●	●										
農・住	リュウキュウキジバト	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
海	カワウ		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
農	アマサギ							●	●				
森・川	アオサギ	●	●					●					
農・川	ダイサギ	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●
農・海	チュウサギ	●		●				●	●	●			
川	コサギ							●	●		●	●	
海	クロサギ			●				●		●			●
海	クロツラヘラサギ									●		●	
農	リュウキュウヒクイナ											●	
草・川・海	オオバン	●	●	●	●	●	●	●	●				
海	ダイゼン	●						●	●	●			
海	ムナグロ	●		●	●	●	●	●			●		
海	コチドリ	●	●	●	●	●	●	●				●	
草・海	シロチドリ				●					●	●	●	●
海	メダイチドリ			●			●	●	●				●
海	オオメダイチドリ	●											
川	セイタカシギ					●	●	●	●	●			
草	ハリオシギ											●	
川	タシギ		●										
海	オオソリハシシギ							●					●
農	コシャクシギ							●					
海	チュウシャクシギ											●	●
海	アカアシシギ									●			●
川	コアオアシシギ						●						
海	アオアシシギ						●						
海	タカブシギ						●	●	●				
川	イソシギ	●	●										
海	キヨウジョシギ					●							●
海	ミュビシギ			●									
海	トウネン									●	●		

海	ヨーロッパトウネン	
川	ウズラシギ	●
海	サルハマシギ	●
海	ハマシギ	● ●
海	レンカク	
海	オニアジサシ	●
海	コアジサシ	● ●
海	クロハラアジサシ	●
海	ミサゴ	● ● ●
農	トビ	●
森	ツミ	●
農・川・海	サシバ	● ● ● ●
森	リュウキュウアカショウビン	●
川	カワセミ	●
農	チヨウゲンボウ	●
森	リュウキュウサンコウチョウ	●
森・川・海	リュウキュウハシブトガラス	● ● ● ● ● ● ● ●
農	リュウキュウツバメ	● ● ● ● ● ● ● ●
森・農	アマミヒヨドリ	● ● ● ● ● ● ● ●
森・農・住	ウグイス	● ● ● ●
森・農・住	リュウキュウメジロ	● ● ● ●
農	セッカ	● ● ● ● ● ● ● ●
住	ムクドリ	●
川	シロハラ	● ●
農	ジョウビタキ	● ● ●
農・草・川	イソヒヨドリ	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
農	ツメナガセキレイ	●
農・川	キセキレイ	● ● ●
農・草	ハクセキレイ	● ● ● ●
農	ホオジロハクセキレイ	●
農	タヒバリ	●
森	カシラダカ	●

※森：森林、農：農耕地、住：住宅地、草：草地、川：河川、海：海岸を指す。

表 10 鳥類ルートセンサスで確認された鳥類



写真8 リュウキュウキジバト



写真9 ダイサギ



写真10 アマミヒヨドリ



写真11 イソヒヨドリ



写真 12 クロツラヘラサギ



写真 13 サシバ

②夜間ルートセンサス調査

奄美大島の動物相の特徴として、夜行性を示す動物が多く分布していることが挙げられる。それらの生息状況を調べるために、鳥類ルートセンサスと同様の調査ルート（図 12）を自動車で走行し、目視もしくは鳴き声によって識別できた脊椎動物（哺乳類・鳥類・両生類・爬虫類）を全て記録した。なお、調査開始時刻は、日没 30 分後とした。

12 回の調査を通して、鳥類 7 種、両生類 6 種、甲殻類 2 種が確認された。11 月と 12 月に記録されたトラフズクは、主にネズミ類を主食とするフクロウの仲間で、奄美大島では冬鳥に分類される。今回の調査では確認されなかつたものの、農耕地には外来種のクマネズミやワタセジネズミ等が十分に生息していることが予想される。この地で越冬はしなかつたと想定されるものの、一時的な休息地として利用されていたと考えられる。

調査以外の時間では、爬虫類のアカマタとハブも確認された。

また、国内希少野生動植物種に

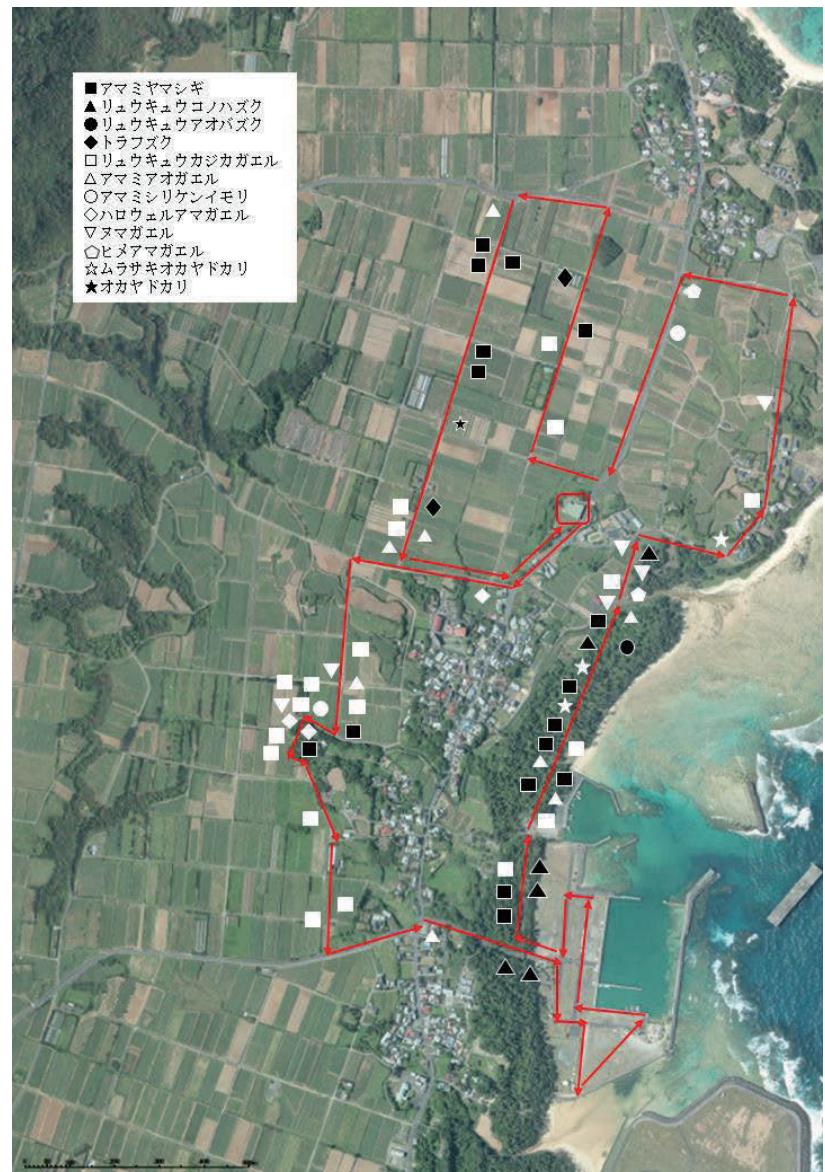


図 12 夜間ルートセンサスにおいて観察された動物種の位置

選定されているアマミヤマシギ、国指定天然記念物のムラサキオカヤドカリ、オカヤドカリをはじめ、法律・条例で保護されている種が記録されるとともに、環境省が定めているレッドリストに掲載されている準絶滅危惧（NT）が2種確認された。

分類群	和名	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
鳥類	リュウキュウコノハズク	●					●	●		●	●		●
鳥類	リュウキュウアオバズク	●											
鳥類	トラフズク	●	●										
鳥類	サシバ	●											
鳥類	アマミヤマシギ	●	●		●	●		●		●			●
鳥類	シロハラ		●										
鳥類	アカハラ						●						
両生類	リュウキュウカジカガエル	●				●	●	●	●	●	●	●	
両生類	アマミアオガエル		●	●	●								
両生類	ハロウエルアマガエル								●	●			
両生類	ヒメアマガエル					●							
両生類	ヌマガエル									●	●	●	
両生類	アマミシリケンイモリ		●			●							
甲殻類	ムラサキオカヤドカリ		●						●		●		
甲殻類	オカヤドカリ											●	

表 11 夜間ルートセンサスで確認された動物種



写真 14 アマミヤマシギ



写真 15 アマミアオガエル



写真 16 オカヤドカリ



写真 17 ムラサキオカヤドカリ

3 歴史的環境

(1) 時代区分

奄美群島は、北海道・沖縄県と同様に、いわゆる教科書的日本史とは異なる歴史を歩んだ地域である。その時代区分は複雑で、歴史学界における共通認識の時代区分が存在していないのが現状である。特に先史時代から琉球国統治時代に至るまでの考古学的時代区分は、沖縄考古学における時代区分が適用されることがある。

本計画書では、奄美博物館で採用している時代区分で説明を進めていく（表 12）。

(2) 先史

①旧石器時代

旧石器時代は、約 30,000 年前に噴火・降灰した姶良丹沢火山灰の堆積層が、土浜ヤーヤ遺跡（奄美市笠利町）、喜子川遺跡（奄美市笠利町）、ガラ竿遺跡（伊仙町）等で確認され、その下層から遺跡が確認されている。人骨等は確認されていないが、旧石器時代には人類活動が奄美群島でも開始されたことを示している。

②縄文時代

縄文時代は、沖縄島まで広義の縄文文化圏に含まれるが、先島諸島では縄文文化とは異なる独自の文化が営まれていた。奄美群島における縄文時代開始期の様相は、暫くは約 6,000 年～7,000 年前の前期段階までしか確認できていなかったが、平成 28 年（2016），徳之島の下原洞穴遺跡（天城町）から約 13,000～14,000 年前に位置づけられる隆起線文土器が発見され、草創期にさかのぼることが明らかとなった。

約 10,000 年前に氷河期（最終氷期）が終わり、温暖化に伴う海面の上昇が続いた。約 7,000 年前には「縄文海進」と呼ばれる海面の上昇がピークを迎える、日本列島の各地で海水が陸地深くまで浸水しはじめる。奄美群島では、現在の海岸線より後方に縄文時代前期～晩期頃の遺跡が分布す

日本歴史	歴史区分	奄美の時代区分	「名瀬市誌」時代区分	沖縄の時代区分
旧石器時代		旧石器時代		旧石器時代
縄文時代	先史	縄文時代	奄美世	貝塚時代前期
弥生時代		弥生時代並行期		
古墳時代		古墳時代並行期		貝塚時代後期
奈良時代		古代並行期		
平安時代				
鎌倉時代	中世	中世	アジ世	グスク時代
室町時代		琉球国統治時代	那霸世	
安土桃山時代				
江戸時代	近世	薩摩藩統治時代	大和世	琉球王国時代
明治時代		明治時代		明治時代
大正時代		大正時代		大正時代
昭和時代		昭和時代		昭和時代
昭和時代	現代	米軍占領統治時代	アメリカ世	米軍占領統治時代
平成時代		昭和時代		昭和時代
令和時代		平成時代		平成時代
				令和時代

表 12 奄美群島の時代区分



写真 18 旧石器時代の礫群(喜子川遺跡)

る海岸砂丘（古砂丘）が形成される。

定住化がはじまったのは約3,000年前の縄文時代晚期後半～終末にかけてであり、ハンタ遺跡（喜界町）、宇宿貝塚（奄美市笠利町）、宇宿小学校遺跡（奄美市笠利町）、^{ぐすく}城サモト遺跡（奄美市住用町）、^{とうばる}塔原遺跡（天城町）、^{すみよし}住吉貝塚（知名町）、^{うわいぐすく}上城遺跡（与論町）等で住居跡が複数確認される事例が見られ、大型石皿や磨製石斧、骨角器や貝製品・石製品等の多様なモノが出現した南島的特徴をもった縄文文化が展開した。

③弥生時代並行期

北海道を除く本州では、弥生時代に大陸から伝來した農耕が地域によって時間差はあるものの拡散し、農耕を示す遺物も確認されるようになる。南西諸島においては、種子島・屋久島までは稻作農耕文化が一部、定着しているが、トカラ列島以南の島嶼地域では稻作農耕文化の証拠を示すものが確認されておらず、縄文時代に引き続いて漁撈採集が中心となる社会が営まれていたと考えられている。

弥生時代の九州地方では、政治的・社会的・経済的・文化的な有力階層者はゴホウラ・イモガイ等の貝製装身具を着用していたことが認識されている。

貝製装身具の原材料となる貝殻は、種子島・屋久島以南の島嶼地域で得ることができ、遠隔地交易で入手していたとされている。それを示す遺構として、沖縄諸島では、ゴホウラ・イモガイを意図的に集めたいわゆる貝殻集積遺構と呼ばれる遺構が確認され、これに伴い在地土器や九州地方で製作された弥生土器が確認される事例が目立つようになる。一方で、奄美群島では、現在のところ、

貝殻集積遺構は確認されていないものの、九州地域の弥生土器と共に、その器形を模倣し、在地で製作した土器がアヤマル第2貝塚（奄美市笠利町）、土盛マツノト遺跡（奄美市笠利町）、宇宿港遺跡（奄美市笠利町）、和野長浜金久遺跡（奄美市笠利町）、喜瀬サウチ遺跡（奄美市笠利町）、西原海岸遺跡（和泊町）等で確認されている。特に、アヤマル第2貝塚と宇宿港遺跡、喜瀬サウチ遺跡では、搬入品の可能性が高い磨製石鏃が見つかっている等、奄美・沖縄地域と九州地域の間で、社会的な交流が続いていると認識されている。

約3,000～1,000年前頃になると、気候が寒冷化したと考えられ、それに伴い「弥生の小海退」と呼ばれる海平面の低下が認められ

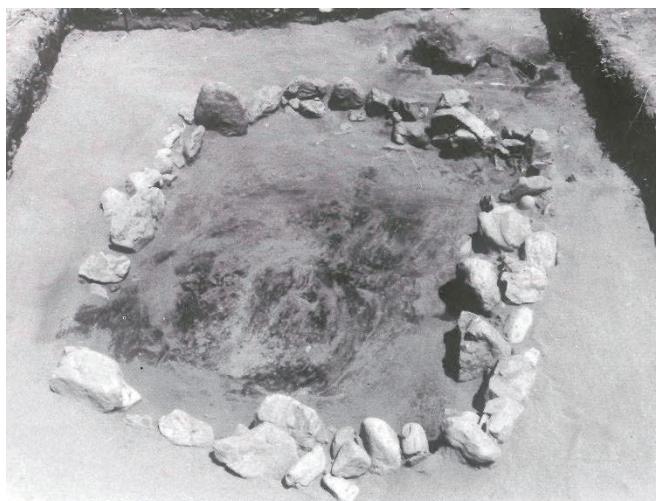


写真 19 石組み竪穴住居跡(城サモト遺跡)



写真 20 ゴホウラ製貝輪
(土浜ヤンヤ洞穴遺跡)

る。この時に形成されはじめた海岸砂丘が現在の海岸線に発達している砂丘（新砂丘）であり、弥生時代以降の遺跡が多数確認されている。

④古墳時代並行期～古代

弥生時代における農耕社会の形成は政治的・社会の発展へ繋がり、続く古墳時代には近畿地方に大和政権が誕生し、北は岩手から南は鹿児島（主に大隅半島）までの地域に古墳文化が波及した。一方で南西諸島には、古墳の造成は認められず、弥生時代に引き続き、貝製装身具の素材となるゴホウラ・イモガイ等の南海産大型貝類を介した遠隔地交易が、奄美群島以南の島嶼地域と行われていた。

古墳時代並行期後半頃になると、ゴホウラ・イモガイ等に代わってヤコウガイの利用が目立つようになる。用見崎遺跡（奄美市笠利町）、土盛マツノト遺跡、小湊フワガネク遺跡では、当該期におけるヤコウガイが大量に出土した遺跡として注目されている。

特に小湊フワガネク遺跡からは、掘立柱建物跡・炉跡・貝製品集積遺構等の遺構、多量の当該期の在地土器（兼久式土器）・搬入土器（土師器等）・ヤコウガイ製品・イモガイ製貝札等を含む多様な貝製品等の人工遺物や、食料残滓の魚貝類・甲殻類・獸骨等の自然遺物も確認されている。このため、当該期における生業活動、食料資源を解明するための遺跡として注目すべきものであり、弥生時代並行期に引き続いて、漁撈採集社会が営まれていた様子を理解することができる。

宇宿貝塚及びその周辺遺跡からも、当該期のスセン當式土器・兼久式土器は確認されているが、出土数も僅少で、遺構等も伴っておらず、その様相は判然としない。



写真 21 ヤコウガイ集積遺構(小湊フワガネク遺跡)

『日本書紀』、『続日本紀』には、7～8世紀にかけて、律令国家による地方統治政策が薩南諸島を中心とする南島地域まで展開されていた様子が記載されている。日本の文献における奄美群島や琉球諸島の初出となる。また太宰府跡（福岡県）から、「奄美嶋」（奄美大島）「伊藍嶋」（沖永良部島）の島名が記載された8世紀前半（奈良時代）

の木簡も発見され、文献史料の記載を裏付けるものとして重要である。

しかし、考古学側では奄美群島・琉球諸島で平安時代まで貝塚遺跡が営まれ、社会の代表を中央政府に派遣するような政治的・社会は形成されていないと理解してきた。奄美大島では、小湊フワガネク遺跡や土盛マツノト遺跡のように、生業活動の中心は漁撈採集であるものの、鉄器を所有し、ヤコウガイを主体とした貝製品の集中的生産をしていた「ヤコウガイ大量出土遺跡」が確認され（写